く不孫支さ花

初篇
下

イカ5
415
3 上

之取。蛇足

外娘語

ふね

うな

けさ

ことわかしも（ことのかたこそのはかえ なかのわかれいきかうしも）

野槌

なりひさこ

白うるさ

阿果梨武者

さいも丸

花ハさつり

住吉まうて（四社、玉津島、子攝、和歌神、相生松、古今。）

足引丸山路ハまよへ

百人一首秘事

つゝ

むかしを

もろこしのかしこ

つくし叢端の宮築

布のもり

うしき庭

やすゞり

うつまさ妻女房の名

放免の事ども

島根大學圖書

イ 5

久保之取蛇尾

定家卿いはく、大かたハいかなる賢者にてもそきことのを書し時よのきこく書失といふものハ不及力事なり。漢家に掛本のかゝる事をもいかばかりうれたしこのもる人よおかせて賢者まじしうるしめど、御封（麿）めりてもなとや本ゝもおゝれすれ字誤ハかくれなく侍るなり○そのまゝなほやまの時ハさくらはなをなくるいとも、ほとゝきすをはとくさすとかくさはありさにあらしで、あまり思ひよらぬ事ハ撥（撥）ゝる時もえゝるよむほうにたかなしびえ底し侍るなり。書人授（撥）ゝる人ハあやまるぞ。後の人秘事異説（契）ゐゝしもえてあめゝしきを是をえゝ付て悦てこやしるまゝ枝をし、松因に桜をなくる花といひ、里ちまゝく久しく来ぬる時、床とくさんといふぞかし。家ひとり人丸が説をなゝひゝるとさんとゝる時、用ぬ人侍るまじき

此さうづなる哥、近古より来たりの人おほくえらびて秘事傳
授の弊かうむりをおほはる
○枕言の事を云、本ハあしひきなどいふものゝよしにて俗にいふ本の中
にも、いまだけだかくて三位二位の人のさぬきをもとゝするぞ
なりて、歌ふぞくれ人の見きゝん時、めでたき事、うつしきこえんに、
ざりけんへくもあるまじといつとなくなりゆくさるゝは父母すぐ
らまそて、さらのそれとらの、わが国にわたし給ひ伝ふまく
人丸かよみけれとなど書みえけれ、いうしらあそばれなりとき春
曙抄に云、此草子第一の秘決なり、抄き人丸
足引のゝ語もしずまりしれ枝まで来る事なりてば
此説で受傳き、又萬葉拾穂抄にも、枕言のことぞを引て
彼草子第一の口決なるよしを書て、さりて行く事
なく、されども此のさき、さんとて、人丸乃素戔嗚尊の作と伝へせり

再案古事記景行天皇段倭建命東征還上給之所云到當藝野上之時詔吾心恒念自虚翔行、然今吾足不得歩云々、又曰當藝號其地謂杖衝坂之、又云到三重村之時亦詔云吾足如三重勾而甚疲
○到能煩野之時思國以歌曰イノチノマソタケムヒトハタタミコモヘクリノヤマノクマカシカハヲウズニサセコノコ 此哥思國哥也云々
あうれハ仙覚ねよこ方沙弥の密日よ山を越るよ大雪にあひて道をうしなひ足をひいてあしのやみてあしきをろろ一とよめると云も倭建命の事をそれてよめるや、清女日本建命をとくさのそのことりいふ東をとやとらの人丸集此

きん事ハいふ哥の秘すまや彼ここの風の古詠朗詠集秘しぬき
まも傳まりきたらんにをそせられにし彼草子よき得り
しるを、宗祇ての、いをゆる。なくしも、決とこまんの来るべしきや
あらんとまく思ふる。契沖も此事、残語して、人丸よき哥その
みらるの作と伝ふよもなきけれぬなりといふなるを。今
案ニ、足引の語もきたらんし。此哥ハ帖よ作者をきさまじん。
綺語抄ニ素戔嗚尊の哥とて、童蒙抄ニアシヒキノ山ヘハユカシレシラカシノ（同下全）此哥素戔嗚尊ノ詠ナリトイヘリ云々。
是ハまつりと決せさらしにハ、ゆまりと。それのきれ作哥といふ
説も、古くよりなりといふらし事なり。されども此哥ハ万葉集第
十冬雑歌四首之内　足引山道不知白杜枝枝母等
乎乎尓雪落者　或云枝毛多和多和　右柿本朝
臣人麿之歌集出也但一首或本云三方沙弥作云々

歌なれハ人丸とおもひし
暗記の誤りを傳へしや
あらん歟後葉のためにかく
こゝにしるしをく

一華堂秉阿和哥ハ
兩家ヲ相傳又牡丹花
老人ヨリ六次之傳ヲ
受と云

（契沖師云右ハ四首よみてての注なれハ但一首とハ足引の作者の事なれハ但ノ下ニ後ノ字或ハ此ノ字等脱したるか云々）此人丸集に出るのと自注せられしもの人丸乃歌にあらん.人麿歌ハ.柿本朝臣人麿作歌と集中明らかに記されし.本集自注かくのごとくなる後さし置.他説をのべつゝかされ.仙覚抄云.三方ノ沙弥か悪日に山を越えられた.大雪にあひて.道をうしなひ宿りかね時.足引の山ぢもしらずしらかし乃.えだもたわゝに雪のふれゝばとよめりといへり

一華堂勤息切臨（源氏辨引抄ノ作者秉阿カ門人）の抄物をえらん作りしにいはく.拾遺集抜書家傳抄也云々「足引の山ぢもしらずしらかしれ人丸が歌なり.清少納言枕草子ノ難きし「しらかしの雪も消まし足引の山路ハ誰のふみかよふへき此歌の心を取て.足引の山路もしらずとよめりと云々此歌にふて.しらかしの雪も消なまし.然るを素戔嗚尊乃御歌といふにや.今按ニ此歌ハ後撰集雑三云.大輔かさうしに.敦忠朝臣のものいひけるをとをくいりけれハつかはしける　大輔

「こゝちもちぬ物をおもへる足引のふもとにも人もありけり

返し　敦忠朝臣

「しらかしの雪も消にし足引の山ぢを誰かふみかよふへき

かくあれハ.しらかしの雪も消にし.此歌にて.敦忠朝臣の歌なる哉.人丸の歌をとりてよめりといふや.先にいへることく云へり.是等ハ論（アゲツラフ）でまでもなけれど.とかくいふやうにして.かゝる事もあらさりしかなり.通村公の九六新注にふるゝなり書物にてもなのまゝなれど.師傳にても.近代の事ハ誤多ノあるべし.とかく道理のまゝなるをなしとて.後人の為なれとて不可用云々.近き世乃和歌老流の癖として.かりそめの事にも傳授口訣なといへハ.お

のまゝを伝ふるあやまりなくして、人に付属、誤りを伝ふるもあれ
ばなし。菊好が碁盤のうへに石をならべて見するに、ちがひなる石
をもとめてくらぶるに、あらはれず。わが子もよく覚えて、よくなる
まじ。あやまりたるにちがひけれバ、等閑にする事なかれ。あるは家
の事知るにもさても違ふべからず、只ちかきをたゞしくすべ
しといへる事を思ふべし。梵燈庵云、ちかきより高きにのぼらん志
ある人は、のちに高きをこゝろみ、思ひ伝ふるとも、のぼる事は
只家の道をまもるべくして、見るを道とするなるべし。他の力をかるまじきぞ。
仏法も、江上一路（向乾）とも伝れバ、只伝ふる事なきを肝要
なりとぞ。日本逸史序ニ曰、吾神國之訓、非レ不レ欲レ令二天下
人知一レ之ヲ、尸ヲ喩サ之ヲ。然レモ秘授口訣、不二敢テ軽ク示一サ、非ルニ其ノ人ニ。蓋シ師
資敎学之慎、所ニ以テ隆ニ教ヲ守ル道也。然ルニ後世多有下竊ミ名ヲ背テ
実ニ以テ欲レ済ルニ其ノ私ヲ者上。是豈傳授之罪乎。流俗之弊ナリ。云々

或人云、物毎に深ク秘すること其道絶、我国
は神国なれバ人皆神
道を知りて行ふべきを
むしろ神秘をなし、
人学がたく、却て異国の
仏法儒道のことを学
ぶ。是秘事の其道を
そこなふなりといへり

宗家卿、以二書生ノ失錯ヲ一、稱二有職ノ秘事ト一、可レ謂二道之魔障ト一と
のたまへり。まことに書生の誤のことをも、秘事と思ふ人あるを
いましめ給へるもの也。ゆゑある古物語、草子などのう
へに、或ハ口ケノ伝、之ケノ秘事などいふ事も多くあるハ、しく
よて字也

○綸舟の事ハ、宗祇云、綸舟とハ云事ハ、源氏物語淀川の
舟にめされて、須磨のうらにおはして、駅路の綸綫
ふひまよひてかなしきなり
綸舟とハ、舟を引せらる事なり。さて須磨の上臈にをさめしを
とあり。今按に、源氏須磨の巻に綸舟の事なし。又此事ハ
千五百番歌合、雅経の四百五十五番左、顕昭のいへる上の句、
よみうるもやさわくらんとある。判者慈円和尚まで、何の判
詞もなし。綸舟の事ハ小倉問答云、綸舟とハ、奥を遣つる時なな

どへゆるをやりしとて、舟に鈴をかけて、沖を漕まはりしとぞ。此説にて顕昭の云もよく聞ゆるなり。歌林樸樕第廿八云、鈴舟ハ公家御アリキノ時、驛路ノ鈴ヲ持給也。行平須磨ヘ下向ノ時「スヽ舟ヲヨセクルナミニ驚テ（下同）是ハ行平の云のとせられてあれ。貞徳も宗祇の説に付なから、源氏になきて事なきをて、行平と設て、又謡られたり。漢ハ日本紀通證などにも、此説を載て謡りを傳ふなるべし。抑源氏係名せられし須磨に赴給ひ、行平にもあつて、須磨に稱し故、昔は驛鈴を用ひ給ふべき理なし。驛鈴ハ數定りあて、こまで給ふと給ハ、めいほくある事なり。又輔親に云、能宣この伊勢へ下てくの使に遣ふしに、まくさの鈴のかさりしあやうれハ、ふりて行くをきうかぬれ是示に知くし。驛路鈴ハ數七ッにて、官使七道へ赴く時一ッ

て給ふよし、行よ口のかきたる鈴、その鈴を驛まもる使ハ、そのほどよろりよ付てあしくといへり。禁秘鈔云、大刀契（タイトケイ）。匡房記ニ顕実云、一鈴印（スズオシテ）同記ニ俊実、通俊、曰ク件鈴、太（タ）有レ興物也。或六角、或八角云云。上古ハ少納言伺見歟。又節刀ハ鑰ハ、天暦帝、付（ケテ）寶ニ劒帯ニ取リ不レ離レ御身ヲ云云。誠ニ我國ノ至極之重寶ナル者也とあり。鈴印ハかく刀契節刀なとく、并のせらせ給く。尤國の重器なり。其のほかを源氏左遷の身なり。行平勅勘の人なり。いかでかなやかく鈴契を用ひおはしまさむ。杜撰乃説なる事しるべし。又仁徳紀歌に見えたる那（ナ）珥（ニ）波（ハ）譬（ビ）苫（ト）須（ス）儒（ヅ）赴（フ）泥（ネ）苫（ト）羅（ラ）脊（セ）とあるを、釋云、鈴舟以レ鈴餝舟也云云。是ハ太古の餝舟にて、別れ事なるべし。驛鈴の事ハ、始て孝徳紀に見えたれハ、仁徳帝よりハ遙にほどの事なり

○溪雲問答云（幸隆問）貞佐、百人一首に、ある首此云のとかと

とならハしハ、此相傳をもろ〳〵事にゆやと君か上ルに、知らぬ事なりと仰られて、今ハをさ〳〵しそと此君あり、さま〳〵のよし上ルに、此笑なりしを秘ごとなさる事知るべし

（所謂秘哥トハ人丸 喜撰 仲麿 忠峯 定家ニ条家
家持 法性寺入道 忠峯 鎌倉右大臣 經信他流）

○歌のかなといふ事ハ、日本紀にハかなといひ（顯宗紀室壽詞ニ哉云柯侫ト云ゝ）萬葉集にハかもといへるを、いましくハ通してかなし事と定ゆ。萬葉第七

〽天のうみあらきぬの沈乃きしとふ宮、ハ神ゐまつるにかゝれ

告をとふ帖にハぬき事にかゝるかもとあり、古ふりしを今の世にハうたをよめハ傳授まて、かもと云ふるそくるしかりをといふ人も皆ゆるさんはぬるすなり、うたとも傳授といふ事、いとしへにありしといふ事いまえをいつのほよりいひそめしまやあらん、今の世にかぎらず、きころをゆるく人ハいつき乃詞ハ、法をされてまそえもしよみうる事かなふべし。

○つゝ小方哉ヨ下、或ハ而とかへり。管、鳴、鶏とかきて、係字と日本紀にハ、以とふえしよまり（仁徳紀三流以遠流字 書以因前起後語）一書曰、留、漢文まてふんまた而の義にあらは、かうつあらまにハつゝハも、學而時習之、よりてよろくし。然とも下に至事なし。日本紀にハ露にぬれつゝなと、下に至ることあり。漢文にてハ、秋の田のかりほの庵乃、苫をあらみ、而我衣手ハ露にぬれつゝと云義とならさつ、彼ぬる衣手にほ漢文の通り、歎て志のも猶ぬるゝハ如是なり。日本紀に撫而哭（カキナデツヽナク）、日本の書よみつと爭ふるて、これの始なり。神代巻大蛇ハ章にあり。然をハつゝハ而とふ云を本體にかくてみるべし。然ともつゝに十一種ありなから、けるにわかち、論ふりて、法ぐくるて、疑ふ、つゝといへどもよむうつゝんをかよハるつゝ、んなさつゝてつ。たよかよふつ

哥によみて。包むて

（堀川百首）氷とくこのかはなみに来るあはつ咲まよふつゆなりをかくれつゝ

是なりけりとなり。武者小路実陰て。紙屋川の梅もほころび侍りし時

咲わたる花もかくるゝあやふしと見つゝ猶行竹のかきねし

（新後拾）風かよふ尾上のさくら咲ぬらしつゝみもあへぬほとも雪とみえつゝ

けると云詞は通ふなり。花をもしぬほともと云もハ。その字の意なり。もの字にかつて、つゝをかくしたるものなり。是を移りてとりよ。續らすての為にもよむ有なり

（續後拾）浪のこゑや関屋の板まをもしあかぬ有明残りてもつゝ

是ハ忍ぶ猶ふせつゝとこそえたり

（續古今）春風の空なるほとに梅の花猶のほの香まにほひつゝ

是を包むつゝと云。哥の證にて、さゝやつゝを包むもあり。依て、むと

新後拾遺

今案に此うち拾遺
春下二条院御製
ちりしくる花をうけつるあやな
く袖に雪とふりとるゝ
是三の句つゝあらは
いらぬ今のぬく
載らるしかとも
まや

つゝむ下略の詞なり

（伏見院御製）桜咲やいつこみよしのゝらく霞こめて

是をつゝむと云。霞にこめつけてとらしところなり

（續千載）消とりうちまよふ花ハ春なから山風さむく雪てふりつゝ

是を疑ふつゝと云。つゝは常てなれとも、疑ふつゝ下に置るその為。疑のつゝと云。春なからとあるゝれいなからつゝになるなり

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪ハふりつゝ

是を詠ながらつゝとは傳ふる秘なり。是宗匠家にても秘せらるゝハつゝていつゝもと云詞に遠つ之。雪ハふるといつゝもと云ところなり

（新拾遺）悔しくも梅の花をうけつゝあやなく袖の雪とふりしく

比て。至極なりけれつなり。つゝとみなりて。つゝのかなし。是をかく通ひつゝと云。悔しくも梅の花とゝよみ通ひつゝ。云詞ハ流るる所。包むも、花のかもなし。詠んを付へし

日

こひゆゑのなみだにつきてうき人のこゝろしらるゝも忘られて

忘かれなきてなり。胸深に置ける詞てなえなり

（建仁二年内裏哥合）秋虫のちかおる野へのくさんるあやしく袖に露られて

忘いでつと云て。本體の詞なり。俊成（哉允）に負てつゝ、玉極の作

に云ふ執筆なり

これや此ゆくもかへるもわかれてはしるもしらぬも逢坂乃関

後撰の序にて、わかれてハ。わかるれと歎たる詞なり。

百人一首にハ、わかれてハと、時の風に改められたり

（続古今）かくれぬの下はふ芦のねよする年と人こそしらね袖ハぬれまて

ちとよい、通ひつゝと云、袖たぬまでのしになり

今按に、右の書いとくはしきやうなれど、あまりよつて

ぬくて、わづらはしくおぼえたり。第五句に、尓（ツハツ）而の字

を用ひぬれまでて、ツての意此毎字の代出べうきざいつれ。ながら（ナカラ）

らよそてとも、いかなる事とてのいふにハあらず。乍（ナカラ）ト而（ラ）ト

ツトハ、よく通ひたる為に、ツハトモテトモいふべきことなるを、よ

いつり。狭衣第三に云ば、わすらるゝかはらひ路ぞんと、いふ人ならバ

よろこひなからあるものとまし。それよろこひつゝなんよろこひ

ありなんといふハ、ありしことなるをと、よろこひなからのことといへるよし

あらし、東雅よつてと云詞ハ、つゞきてといふ詞也。竹ハ節毎に續

つゞく事を筒といひ、くつひと訓されし。つゞくれ義なりと云

或云つてといふ詞ハ一ッ二ッと、物をかぞふることなりとも

なかぞへつといつハ、詞をかくなりとぞ。それをながくへつといへど

餘情あるなり。其のかぞへつといふをば、此なのかぞへとにゆくし

きてまながらへつ数ふるとして、なかるひ、其のかぞへつとらふべき

を、下の句の一段にかさねて、つてといふなり。いよく、といふべ

きをいよいよひうらくさとといつて、かぞひあぐそ

神代巻以岐神為郷導周流削平

かそふてのうたの詞そ、すくなくしておほみこゝろといへん
とて、おもひつくところをおもひつくなり、作りたるをよせき
ふりくらへ給ふなりつとらふそ、作りつくくし、めさらしぬれ
くなり、他一ッの事をいふかゝりとも、後世、つなぎてなと
名をつけてはさ字ゝの詞のこゝろをまもらぬなりといへり、今
按ニ神代紀ニ周流をメグリツヽとよませたるをおもふべし、
一首の中につゝ三ッあるを
　山振ハなでつゝおほさんありつゝも君来ましつゝかざしたりけり
万葉集第二十巻ニあり
或人云、一日國のかみの館に居なる人、両三人来聚し席ニ
集りあひしに、物かたりなどしめやかにて、おのゝゝもよう
國にかはりある事ゞくぬ事などうち出しきこえ、興ありけるに、
つぎにこの物かたりまじくなりしに、ひとりの館なる居のいはく、
家のいのちをまもる君も、出て見れば後のゆき行しかなりゆく
いきれしにおもとをめて、そこ人乃歌乃うちやすまかれしとて
いひし
○歌ひのうた文字おもかしいは清ミてよむへしとや
　あさましいかなる花にも奈里弖之可都にゆきてそやかつ見ん
此歌のなりてしかの文字、可とよみたるべし　契説　万葉
第廿巻ニあり
○上にこそといひてかはそはあれいはとのことを今の
人はいひて、古人はこそといひてそとも留むる
万葉集第一（長歌）かく山はうねびをゝしと耳なしと、あひあらそひ
き、神代よりかくなるらし、いにしへもしかにあれこそ、うつせみも
つまをあらそふらしき
同十一

なすは人あし出そくやハもしたまふへおのゝの妻ならそとこ名つけしき
わかのそこにおこなはふの名て生ける詹のいとも今こそ忘ハえへまき

同十二

むつましき契ぬる妹もあらはこそ夜のちきりもしられしうへき
柁をかし。此歌ハ外れの夜ゲなる哉。二回通してさとともわかれ

○壬二集に　嵐ふくさゝらのむかしてさての軒たかう
雪そらうかゝん此歌を釋して。むらかしそといふ抱水園うへて雪を
はらぬ具よ。帚うて輪をして。それより家のうへなる雪哉
拂ふ物をいかにも。又ハ菜の本まて。わらまきのやうなる物をもこし
らへ雪哉そらふ物なりしも。或ハ雪拂ふらしきといふてものなり
なとゝいふ説あれと。昔よ任もうまたらす。月村斎宗碩聞書に云
此歌ハうてそれもくにが。そのむかしくゑをハるそのうちたぬきに雪を
はらふやうまてしきる哉いふなり　とまゝ正説とらふへし　しかあられ

事。其説を好。家説におちいるへからす。よくあらそひ
風情を思ひめくらし。説の邪正を知へき事なり。今按ずるに
心敬僧都の句に「雨まとし五月の空のむらかりて。自注云。霖
雨のやうく晴の日なと此乃風情なり。空のむらくものまよふといへる
はかうし景曲躰とて今の人さまくの風躰をとるよなり。これにはよ
てし。前説の是非いよく明らかなり。此句白なとをかける竹のさきに輪
をさしらへ又ハかしらまきぬやうなる物にて。雨を拂ふ具なると
いふつきすやて解レ頤

○御綱葉（ミツナカシハ）ハ仁徳紀に見えたり。類聚國史。作二三角柏一。延喜
式。作二御綱柏一。又三津野柏。延暦儀式帳。作二御角柏一。筑
紫風土記。作二御津柏一。　拾玉集云。神宮之中。禮典之
間。為二永例一。有二長柏一。謂二之三角柏一。件柏者。志摩國吉津
島界。土貢。島内。山中生二木上一也（已上通證）されハみつなかしは。

みつのかしは、みつなかしは、なかゝしは、皆一物と志るべし。

釋日本紀曰。大神宮。大同本紀曰。神祭○釆女二人御綱柏ニ盛レ酒。毎レ人給云云。夫木集に度會仲房

むかしよりみつのかしはのさゝげつる我あまてる神もうけてめぐむ

新千載

わきも子かこゝろをそて川の岸に生ふる実をとりてのかしはゝ我志るき

寂阿百首

おもふ事とくのみ志ほのなかつしてなかくそ我むひろさ恵をもめ

伊勢記云、かしはのやうにて、ひろさ二四寸、長サ二三尺あまり。まつもに常の柏木の葉には似ずとぞ。東雅曰、古事記日本紀に、仁徳帝ノ皇后、豊楽し給はんとて、御綱柏とりに、紀乃国へ幸ましませしなども見えたり。古へには、ミツナといひしを、又ミツノともいひしなり。古語にナと云ひ、ノといひし例いくらもあり。ナといひノと云ふは、並に詞の助なり。ミツとは即瑞なり。瑞葉とは猶瑞穂といふがごとし。葉を称ふるに瑞といひしと見えたり。古俗カシハといひしは、槲（カシハ）の葉の事にかぎらず、すべて飲食を盛べき葉をカシハといひしなり。カシハとは炊（カシキ）屋にて炊（カシキ）たる飯を盛りもし、包ミもしたる葉なれば、かくいふ。膳部の人を呼てカシハテといふも此義なり。即今もいつきのみやにても、今につかさどるものにまゐらするをカヘシキといふも古語乃残れるなるべし云々。又曰イハトカシハといふ事後人の説不詳。舊事記古事記日本紀等に磐戸とも磐屋戸とも見えしは、即齋殿の事をいひしと見えたり。たとへば式に見えし神祭供物料の槲のごとき、これらていひつらめ云々

今案に此いにしへかしはの説は、いかゞ侍らん。萬葉集第七

能野（ヨシノ）川（カハ）石（イハ）迹（ト）柏（カシハ）等（ト）時（トキ）齒（ハ）成（ナス）吾（ワレ）者（ハ）通（カヨハム）萬（ヨロツ）世（ヨ）左（マ）右（テ）二（ニ）

色葉和難云、石をかしはと云。萬葉に堀りし玉かしはとよめるも、水の底なるをいはんがためとぞいへど、大かた人の詞にて

なつかしハ和名鈔
楢（和名奈良）とみえ楢葉之（ナラカシハ）
あゝのなつかしはよめるは
然り。楢小葉之（ナラカシハ）ともよ
かしはハとよつ葉之
あをかしはハ青葉之

淵の中に岩あるをいはかしそのあるをといふなり。されハいそとかしそもおなじ詞也。さきはなるといふ詞にて、ハに常なるといふ意なれハ、さいふなりけり。契沖師云、いはとかしハ石をいへり。景行紀云。天皇祈之曰。朕得滅土蜘蛛者将蹶茲石如柏葉而挙焉。因蹶之則如柏上於太虚故号其石曰蹈石也云〻 按に上の百四首之合に

題 略

流は波くゝるやせハよしの川いはとかしはをこゆれなり

続古為氏
よしの川流淀川風おとさえていはとかしはにふるさゝ波

是も石とこゝろえてよまれしなるべし

○あからかしはハ乃事。契沖師云。かしはとハ、すべて葉広き木をいふかしはといふが正義なり 仁徳紀。御綱葉（葉此云箇始波）是を證とすべし。和うしそハ鉛義にもまでて葉広きかなるべし このてかしはハちひさき葉なり。ほゝかしはハ厚朴の葉。あからかしはハあからみたる葉なり。うきぬ柏縄に松の葉をかしはとよめるハ総名なるをいふなるべし。かしはハ木の葉をもいふにて木の葉を総守部をいふなるべし あからかしはハ草の赤き葉をいふ。又芽出し乃赤きをもいふべし。いまも其部従者葉を祭りけれハ御祭葉ともいへり（右の内まかしはの説ハうけられぬを愚考有別巻）

○羅山子説に 草の祖をも野槌といふことせられしハ神代巻に。生草祖草野姫亦名野槌云〻 是によりて名付られしなるべし。又沙石集第五に。野槌といふ獣あり。形大きく目鼻もなく只口ばかりありて人を食ふといへり 名を何にかして大きなるつちのかたち或人云。吉野の川上に有一蛇土人名野槌此蛇害人云〻。字鏡に蝮（乃豆知）と訓ぜり是なるべし

野槌の義也

信景云、もかうハ常に御簾の上の方の端と幅のまゝに下へとかうら付とて垂ぐ云是みとのもかうといふしハ翠簾と重しを上に帽額といふまゝ云の几帳とを立てをもかうとの几帳の方をおほえせしとや。今俗にいふ水引ハ昔所謂帽額也。帽額ハもとは古ゞ混しられた

○つれ〳〵草発端のことはハ和泉式部集につれ〳〵なると
をりよしなし事におほえしことをかきつけしまゝにそと
摸して潤色せらるなるへし
○（十六段）なりひさごハ生瓢（ナリヒサコ）なり。和名鈔に瓢（和名ナリヒサコ）可以為飲器者也。
又杓（和名ヒサコ）斟水器也云々といふは、瓢をもて水を汲しなど後
人瓢をなかはひらく杓を作り、杓を即ヒサコと名付、故に瓢をもて
生瓢（ナリヒサコ）といふなり。今杓をヒサクといふもヒサコの転語なり。又檜杓なり
○（二十八段）あしのみすをかけて布のもかうあら〳〵しく
今按るに類聚國史巻三十五、諒闇部云、御簾及屏風之
縁並用黒染細布云々。讃岐典侍日記に、はしまへのみそん
まそ、おひきらしけるあしきのいつものけらきこへす
ハおひきなりとそ　一書曰、村上御記曰、天暦八年正月八
日、母后崩、今朝撤常御簾、改懸蘆簾、以鈍色細布

かくし上にあく　おへきも
なかうの額といへとも
門つとに掛るなりて
称するはとし簾の帽
及帽額に画く紋とも
つかうといへとも鞆に画く
紋とでもあとしに同し

獣形帽額、紫宸殿大禮之時懸、代上ハ引とも云々

為端帽額（ヘリノモカウト）云々　天野信景筆記云、枕草紙にきぬ乃こともれ
もかうと云ことかうハ簾負（ミヅヒキ）まて帽額の音の転せるなり。布乃
もかうハ倚廬の御所に布のもかうさせ引侍るなりと云々　定基
云法説云、もかうとハ錦綾にて撲なとの簾の上に引物なり。世
俗にハ水引と云。帽額とかきて額のくしなり。金襴なとにてし
するを金襴もかうといひ、白絹に獅子なとかきたるを獣形帽
額と云。是をかうを当世水引といふハ誤りなり。上に張をも
かうといひ、下モに張るを水引といふと云々
○（三十段）からハけうとき山中にをさめ置てといへり　今按万葉集巻九
あしひきの山中におきて置て、ひとふたまてころくらし云
○（六十段）真乗院に盛親（ジヤウシン）僧都とてやんことなき智者ありけり。この
僧都あるはなはをみて、しろうるりといふ名を付たりけりと
ハ何ものぞと人の問ひければ、さるものを我もしらず

あるまじうは。此傍訓ならはに似てんとそいひつらし

今按ルに。此白かりといふを。秘事傍訓なといひてん事うけ
らるゝは。此一篇の文意疑なけれは。つくハ白かりといふにて
我悪釈せるなるといひ誤りしを。傍人といふなる物
そとさこの色し時。屈せざりて家も志らびさる物あらば。此傍乃
或は似てんといひそれしなり。さやうにいひそれし悪釈をらハ我を
知らさふくいひそれしを後人の知りハつくりしまく。傍訓なといい
ちん事。ならあらん人。誰この容べきさいはゆる定家卿の以書生
失錯稱秘事可謂道之魔障との給ひしごとく。是ハ失言
を秘事とまうすなるべし。もとより兼好ハ隠遁をとぬむ
志より。秘事なといふ事を嫌ひとみて。揚名介。呼子
鳥まても。自見をあらハし。其外故実をあらハせる事数ヶ條
なり。書をみるにハ。先書の大意。作者の意趣をはかりて
みるべき事なり。夫書ハ編その一篇乃文義も。其理り
よく後代に通せん事を思ひ。ふを用て述作さる事
よのつねなりされを並ぬ。なんぞそしめより秘事傍訓
を構へて。書ハ編するあらんや。よき我察せさるものを
なんぞや

○六十一段
御産の時甑おとさる事ハ。府くさるゝ事にハあらず。御
胞衣とゞこほる時のまじなひなり。下さ侍よりき事おこり
て。其由来説なし。大原の里れて我めるかるうさ

山槐記即安徳帝御降誕ノ記

高橋氏云。山槐記云。治承二年十一月十二日。未二點。
皇子降誕。自㆓日隠間上㆒轉㆑甑。（件甑自㆓大原㆒渡㆓内膳大炊㆒令㆑用之）
本草綱目云。甑　集解。主治下㆓死胎㆒。附方云。胎
死㆓腹中㆒及衣不㆑下者。取㆓炊蔽戸前㆒燒末。水服。即下ル
千金方

○（六十三段）後七日の阿闍梨。武者をあつむる事ハ。いつとかやぬす人にあひたるより。とのゐ人とて。かくこと〳〵しくなりにけり。

此一條ぬすと人にあひたるより。此修法中にはものを集る事になれるそ。おたやかならぬよしいひて。盗人にあひける時代を。先考へ注すへき事なるを。諸抄にこれを注せす。大全に安元年中にや後にやといへるも。さたかならす暗推までなるにさらん。今按に。四季物語云。（崇徳帝）大治二とせの春ほまぬを人おほくむき入て。よひねの僧あまりなふくの衣。あるハ。佛具なとうハひとらしより。法会のつとひにハ。武家乃うちちよるハ衛府のたけき人。けひかしこくもうちかなと。さらやなくひをそなへ篝あまりともしてまもれることそなり

○（百段）久我相國。殿上にて水をめしけるに。主殿司土器を奉りけれハ。まかりを參らせよとて。まかりしてそめしける

一條兼冬公御説云。まかりハ本名合子（カフシ）といふ。出家なとの用ひしまろくぬりハ數をみくてし。殿上人の殿上にまくらのわと合ふ物なり。昔ハ常に殿上にをかれし。古書に載たり。今ハなし。こゝにいふハ主殿司。相國なれハあなとりて土器をたてまつりたれハ。相國ハよし相國にもあれ。殿上にあるうへハ殿上人の格なるへしとて。まかりをめしたるこて秘そ。まかりの文字ハ。罷（マカリ）退（マカリ）二字ともに用と云そ。字釋事もなれハ。わつらハしくてもらしつ。

多田義則云。曲觴（マカリサカヅキ）とて。木にて撓曲（タワメマゲ）たるさかつきあり。上代に用ひたる物なり。今も古き神社にハ残れり。攝津（ツノ）國天満天神宮。六月祭礼。御旅所にて神友圓居（マトヰ）して神酒をいたゞく。其時各曲ケたるつきを用ふとそ。後鳥羽院の御書にまかりその用さく。今ハ採めつらしくなりにしと見ん

ゑらび云く。今按に。長明四季物語云。菊のしつくは。よくほ年老たる露を雲とのうすせきさ給てさらし。光し給め給。仙境の菊酒をまゐらせ給ひなるべし。君の御まへのうつて諸薬師の印相を結んで。雫をとりてこゝろむるに。上戸はまかりしていくらひもかうむくとも

○（百十四段）今出川のおほい殿。さがへおはしけるに。ありす川のわたりに。水のながれたる所にて。さい王丸御牛をおひたりければ。此ことものさい王丸は云く

今出川のおほい殿は。西園寺太政大臣実兼公之男。菊亭兼季公也。さい王丸は。賽王丸とかり。駿牛繪詞云。後嵯峨院御代ほどに名をほこりし御牛飼のうちになをてさつのちれくつる事侍りき。孫三郎。鷹法師。賽王などそうしてきこえどもそこくひかさのものにて侍しとぞ。又云。寛元四年。御脱履のはじめ。西園寺太政入道殿。本来（モトヨリ）牛馬のはやしを世に勝おもしろかれば。この御牛飼も彼方のこようにぞめされ侍りき。孫三郎。鷹法師。賽王丸等也云々。常盤井殿より累代まで今出川殿も牛寄の事に委ほそしかしたるなるべし

○けふまで侍りし女房の名ども一人はうちさくら。一人はうちふかう。一人はおとうしとて云。今按に。此名を勝彼の注を加へることやくなき事なり。そもそもめづらしきなれば筆序でのゆへにとりてあつめおくしかやうの事跡の筆例にあるすなり。業も物語に見えて此説を東之条院も答語ての所に云。こゆきとてわらはすくなうは従に尼になりしかば。つれしとつけさせ給ひ。わらは之此侍のは世話ぞうりしも今ぞおほくあつまりつるは。ほ

めさし・すいさし・ちまき・ちさこ・なと云よし清少納言もしるし侍りき。枕草紙には藤原時柄（トキカラ）がこまやかなる名のゆかしきなとさへ見えぬといひし執柄家にはわかのそれはいとさかりしをさへ見ゆる名（ヨミ）なりといへるもあり是皆旅名なり孝徳紀には中臣連正月塩屋鯯（コノシロ）魚といふ人も見えたり

○（下一）徹書記物語に。花はさかりに。月はくまなきをのみ見るものかはと兼好がかけるやうなる心ねをもちたる者は。世間にたゞ一人ならではなきなりとぞ。今按に。四季物語に云。月はいつとてもなかめつるにえんなるものや。くまなきこそゆきはてまでもあかれねとぞ。其比既にかくいへり。兼好法師これを見て書りと見ゆ。すべて徒然草には。四季物語を採用して書る事多し。ことごとく挙るにいとまあらず

○（下八十五段）放免のつけものゝ事。説々ありて秘事といへり

今按に。江談抄云。放免賀茂祭着ニ綾羅ニ事被レ知哉如何。答云。由緒雖レ尋未レ弁。被レ命云。賀茂祭日。於ニ桟敷ニ。隆家卿問ニ斉信卿ニ云。放免着ニ用綾羅錦繍ノ服ヲ為ニ検非違使ノ供人ノ何ノ故乎。戸部答云。非人之故ニ不レ憚ニ禁忌ヲ云云。云々。しつらハ放免とは検非違使の供人をいふと知るべし。此四季物語四月かもまつりの条下に云。さいのほこもちみえけるやうのもの。放免の下人の袖たもとにはなやかにはりつくし。秋の花のさく。百（モ）なりひやうもさきになりたるとおりしこゝろえぬものなりけれ。尺素往来ニ。廳下部皆當色犀鉾持。以ニ金銀風流ヲ付ニ于衣裳ニ云々。つけ物といふも。此等の文義にかなへり。壽命院抄に祭礼ノワタリモノニ色々ノ出立ヲシテ。身ノカザリニ物ヲ付ル事歟といへるは。やゝまさるにしても一応義に

叶ひ星

○ことし年のむ月、住吉の大夜ねこもらんとまうで侍りしに、あらかじめのつちもこのもとはかりれゑのくしきに、いはきけるふおほちのあつかひしきにきづのたまふことにきむしをぐまれやと、濱邊はるく傳のりて、松原の亀へあゆみしに、沖つ風もよせ来ほとにふきて、松のしづえうちそよぎ、色なき風もまちあらしとは、きゝそやかふらんとおほしきにいでたるすゑハいとかんさびたる翁の、いやつらあさなきが、なよよかなる志ろのきぬに、はのまのをそでたかくかゝげて、ふとせのみどりをみぞりとうちぞしふなばし渡とまもりて深き底ハおのまつもそこなきつのもにきづくさうちまさてまうけぬまハ翁わがかくをふとみんおとゝせるに、やそかねようまみえをすれハ、おきされいとよそひめてきくわかせ給ふ人と、さてつれ、それいくつとのなり給ふらんのかんさびたるもいくとしのあひ給ふらむ。いづらよりまうで給ふるやといへハ、わきつそ當社に侍りつかまつりしものなれバ、よそぢばかりまてハ、をとこのまねびして、やまとうたひ侍りしのと、今のをぐしくも侍らざりしかハ、をこなかることのみゆうつきさらえて、かんづかへをもしぞくさ、神をふさすにしありきしのぶかくすくなるになりて、年ハいとくあゆみよそぢ、なかばにや近し侍しの此ころハいたくおいしぼみて、かそふる事も侍らざりきふされハ、こそしきいそのかみふるきこれぬる人ゆまてこそおもきされうましくもかゝる人ありあひく待らぬのれ、神のちかしせ給ふてハ、今しハほどもなく侍るへしかくうち深き給ふに、御いとひふかく人なからでハ、お乃川かふ侍りしくらそておもひそめ、松のまへにきこゆる波にし

をとゞめさせ給ひなましむに。当社の古事を。何くれの事も
もきこしめさまほしくおぼしめして。いかな
るそのよし給ひつるもきこえず。ましてわづらはしかり。
ちのしくも物がたりの事も伝はらず。みえざりし事をも。
いにしへの年ごろよ。むかしのまの姿もやうになりもてゆく。
何れもきこゆるつも伝はらんとらすま。さらされ給ひて事をいふ
かし伝らん。さて祝ひえ給ひたりし残らに。いまこのさき
え給へ。されども当社三大神の御名を次第をしら何そ。いつ
其の御名を一ともかゝずや。さるを同給ひて志るさゞるは。あしくて。
いまくこのうさかれおほをも事あるなるべし。神功皇后紀に。
表（ウヘ）筒男。中筒男。底筒男とあるを。又神別記には。押武金（オシタケカナ）
日（ヒ）天皇（スヘラキノ）安閑二年（フタトセ）。乙卯正月（ムツキ）一日（イチ）。以大伴金村大連（オホムラジ）。物
部麁鹿火（アラカヒノ）大連遣（ワ）住吉之小戸而令定神分（ワケラ）。一座天
照大神。二座田霧比咩（タギリヒメ）。三座底筒男中筒男。表筒男
四座神功皇后などみえしところを。おもひいつりてとひ給
ふなるをしめされど。神代巻よりはじめ。古事記。舊事記皆
底中。表といひて。此三はしらの神は。墨江のみやくれおほん
神なりと見え侍るを。一には。やしろを底筒（ソコツツ）之男（ヲ）命と申侍る
なり。二三はおしてしり給ふべし　さて其第四れは社を
は。顕昭の古今序注に。國基神主顕輔卿に語ていはく。住
吉四社の中一社衣通姫なり。わかのみちをまもる御神
と申。是なりといひ。准后親房公の抄にもおなじことし侍るは志
うるふりや。　そもそもさる事まで侍ると。翁のうけ給はりしは。
釋日本紀にいはく。先師の説に。稱四座者神功皇后坐（ヰマス）別
殿といへり。別殿とは。當社の三神一二三とつゞきてたてにかさね
造りて第四の神殿を南にましませは。三神の古社より見

なまりて別殿なり。されハ第四ハ神功皇后と仰く奉りぬ當
社年中の祭礼故実ありて皆神功皇后の勅制にて田裳
見命より傳へ来れり。即其の大祓もまひとつとお
ほゆへし。衣通姫と申説ハ當社を和歌の神と申すを
かりて后の此社をいはひし姫神にてましまして。附会乃説
をまうしいなるへしと。ふるき人ハ申侍しなり。又玉津
島の社を衣通姫とする事も。翁なとハたしかなる事哉。
只もし。覚もし侍らん。國基神主の「年ふれと老もせ
すしてわかの浦にいくよになりぬ玉津しま姫」とよまれた
れハ。堂建立の時。壇乃石とりに紀伊國へわたりしに。玉
津島に神社あり。昔よりハ衣通姫をおさしるさる
強ひて神と現して。あかむる跡なりとかのわたりの人申た
り思侍れハ。よミて侍るや。袋草紙にみえてまつる。いふ。これ
さまても國基ぬしのかんかへ出されしにハあらて。土人の従ひきたる
一書ニハ。玉津島者。玉津島根之命。而稚日霎之貴之
化産之子。而感ニ八坂瓊之麁玉ニ而化神也といへり。是は
よまゝ既神代にあきらかに神とみえしうきる事もやあらん。万
葉集第六の巻うちや。神亀元年紀伊國に幸の時。赤人乃
歌に「やすミしゝわか大君のとこ宮と仕へまつれるさひか
野ゆ。そかひに見ゆる。おきつ島。きよきなきさに風吹ハ。白
波さわき。しほひれハ。玉もかりつゝ神代より。しかそたふとき玉
津島山」それも神代よりものそたふとさとよまれしをもて。彼一書
の説ゆゑあるなるべし。○續日本紀巻九云。神亀元年十
月。天皇幸紀伊國。○詔曰。登山望海。此間最好。不労
遠行。足以遊覧。故改弱濵名。為明光浦。宜置守戸。勿
令荒穢。春秋二時。差遣官人。奠祭玉津島之神。明光

浦之霊。忍海午人・大海等兄弟六人。除午人名従外、祖父外従五位上津守連通姫とあり。僧契沖といひし人の書る物に侍りしが、それにつき侍しは、聖武天皇若の浦を明光浦とあらためさせ給ひ、又玉津島の祠官午人を姓名とせし事もあり。外祖父津守連通姓に改よしめたまひしなり。（養老七正授津守連通従五位下）しるせるを、續日本紀に通姓の姓乃字を誤りて、姫とし、通姫となりしより、好事のもの玉津島ハ衣通姫といひ、外祖津守連といふより、当社第四の宮を衣通姫とする説もいできたりしよしかゝり侍しなり。いとくはしくものしけなきさへ侍りぬ。又当社の小なる岸にならびし塚のたぐひを世に手家といひ、又帝家なりといふ。摂津志に、大玉手家、小玉手家といひ、玉手の岡ならある名、地の名にして家の名となれるをいへり。志るせるをいつれともいつまの人

一説続日本紀元明天皇和同五年九月詔曰、贈右大臣従二位大伴宿祢御行之妻紀朝臣音那。夫存之日、相勤為国之道。夫亡之後、固守同墳之意。朕思彼貞節感歎之深。宜賜邑五十戸云々。南の大なるハ夫大伴御行塚也。小なるハ妻紀音那ノ塚也。世貞節ヲ称して貞塚と云、手塚ハ訛之ト云々。大伴御行ハ大宝元年正月薨。天皇甚惜之。遣穂井倭麻呂等監護喪事云々。御行ハ金村曽孫長徳之子也。金村住吉ニ居宅ありし人なりれせし子孫御行の塚なるといえんもかゝしかなきまハゝに。金村宅ノ古跡在堺北荘高洲濱東云々

の家といふ事をしるせり。　此塚の事むかしよりたしかなる事を傳へ侍らず。もと此家ふたつありて、南を大手塚といひ、北を小手塚といひしが、南の方黄土よろしきにより、家のうち崩しとらる。今ハ北の小手塚のこりたる。翁がいひ伝へ侍りしハ、小手塚ハ狭手彦の家とうけ給り侍る。欽明紀曰、於是大伴金村居住吉宅、称病不朝とあり。是別業ありし事明らかなり。金村ハ狭手彦ノ父也。彼南にありし大手塚と称せしハ、金村の塚なるべし。小の方小手塚と称せるハ、狭手彦の塚なるべし。狭手彦をのちにハ小手彦とも申ハ、土俗つひに彦の字を略し、剰訓を誤りて小手塚といひしを、今ハ手家とさへいふ事になりぬ。大小の塚並びたるを見るにつけ、ちひさなるを小手塚といふに対し、大キなるを大手塚といひしなるべし。さればこそ此塚の事幾年経ぬれど、知り侍し者、いふにも知らでぞ過し

侍りけるに、爰にて翁現れてげる事侍りぬさて当社を和
歌の道をまもりの神とかいふ故いかなる事にやと尋ねし
給へ翁のうけ給りはへしは和歌の三聖とかや申は人丸赤人衣
通姫なり和歌の三神と称しきたりて当社の御事なりとぞされ
ども是はかの親王のゆくへて此翁にはおそれ多きも侍るべし和
歌の道にとくおもし侍ることはかのつかさどるしるしに侍る
なり、むかし崇神天皇の御時、帝ゆめに給はく、摂津国住吉の
浦に天より光さし、三日を経て此所生ずるとぞ見給ふ、人を遣はせ給へば
しるせし如く給ふに、まことにたへなく松生出たり、此時当社
の御神、神霊（ミタマ）を此地に勧請し給ふと、一夜に松の生るたるより
住吉の松を相生の松とも、拾遺集に「あまくだる現人神の
あひおひをおもへばくしく住吉の松もとよあり、当一所の松をはいはに
ますゑの神代やうたがひしまやまとこそのち佐日記にも住吉なき

しるき姫松なる神にてあらをそしともいひ、茶集にてさく住
吉の事をいのりまたよめり、さは平城天皇御幸まし侍
るに、見まへても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく代経ぬ
らんとあそばしけるに、御神あめわかみこのすがたにあらはれ給
ひ「むつましと君は知らずやみづかきの久しき代よりいはひ
そめてきと神詠ましましけり、崇神天皇大和国瑞籬（ミヅカキノ）
宮に御宇（アメノシタシロシメシ）所知食（メシ）たれば、瑞籬之日去敷（ヒサシキ）代より斎（イハヒ）そめてき
とそへ給ひしなり、此説臆度（オクド）に亘（ワタル）に似たりといへども、神明之
過化、存神之妙、用をうかがひ給はんさまで奥義抄にも此事
をさらし、顕昭古今秘注にも業平此事を記て、住吉にまうで
給ひたりける「住吉の岸の姫松人ならば幾代へしととはまし
ものをとよめりけるに、御神あらはれのなりあしげなるいでたちにて、かくぞ
て「衣だにふたつありせばあかはだの山にわれはかさまし 翁

をとよりてきこえさせまゐらす。今おもへて。おほん神こそなんお
ましまさふといへり。著聞集に。大神の御託宣とて。墨ノ江ノ邊リ
松林ノ下ニ久ク送ル風霜ヲとも見えしまへり。小野の御神影向ましまし
ける時一首よちもの松生ひたるなとおもひ給ふ也し。古への
のことなれど。かやうは此さの神詠ハ。田安むの帝にそうし給ふ。
又升随折に。哉一堂西國よりのほりたるが。當社に参りて通
夜して給りたる夢に。當社のまへに。僧俗男女老若参りあつまりて
あまたゆゝしき人も見し。彼人も参りて辞なり。さて
ありて。其衣の僧一人まかりきたる。我ちくめしいまされて給。
たまへの紀我あつて「こゝろなさ身なまあきれハ。たまれたまり時
これハの秋の夕にといふ事を講せられたるを。かんなん神主
國冬云。さみハ多く當社の御眷族にわたり。和泉守通經
小鬼殿にて。紙筆をとりて。そのわ垣のいぬ井のきくの壇の上
二首かきつけにしるして人に見えしたる事や侍らん。かやうのためしを
にまうくおもしまゐらせ給ふ神なれハ。和歌の神ともあかめ奉る
ぞかし。先ハおぼしとらへつし。國助神主ハ。数寄の道にすける
たる神をとしも家の神垣とおもふられしさまもよみたる
ぞかし。筑西の人見るに壺里小野の奥ふかき事を。御覧小
野のかさつるかきくろさん事もおぼつかなし神意おそれ多
又ありとし。出雲の浦のあさくしくなおほしそ。鵲の橋の
ちゝくぞきこえ水のわきられたるハきハ。又そてけさんと待くし
此松うけのやうりたしやうけんとてのし。今ハ月かゝるくし。ち在
の浦のなかわをれ見えて。枝かたるこのまに立あへるを今しばた
まくはさうひなるつきを。ちよそのわするれし事こそさむ
らくといふに。翁又まうけて。くろつのいのほかまてなるかたは
ありつれあふさきを。ちゝくとならし。いのなみいそをのこすハさ

んとおもふいふまに　まさし可の名をもちたる法師に住の了
まつりあひし人あまたありて、事に年比いつれの家もおなしく伝へ
られてもあらひなましかくとなりて、そもそも古今集の伝授は
いにしへよりかくありけるにや、而貴之躬恒より伝へられる
事ともなし、順徳院よりうけつたへしも、いまたもたかりつる此
集撰定の時、宗代の秘事とせんとて結構しけるれ、又後乃
人おはしまして後をわたくしにて、秘事とて称せし、ご後にかくなされ
るるや此伝授といへる、ふつの比よりいてきて、いかなる人のそれぞれ
ふるや、ねんごろに志あらん弟へといつて翁歯もなくて色をとらへ
このようち、わたくしかくることを此老しきてもあなとらひ弟子にはま
かはしつるは、さやうの事は、其翁にもつたくし九いふことさく
まことにとらひの人に一つくれといらふされども幸にて侍るほどもねく
しかしと人に、やつきまでの下さるものいつてなくさらひ侍らんさる系

事、侍ても、さりぬると翁にいは、かくてもいかにそは、つたへ侍りし、此くへやつ
がまさにおいてかくる事に侍る。さつちらのきかれ翁にあひ
まつらるのをし、人残もうけ弟子侍るかそ、大ゆくのさしくせな
らさも年比へなりて、宗祇の秘本の高祖にあひゆるをはらひ侍れは、
のちんもゆるきてけずやうし弟へさるや、とおほやうしたき
のにそで、おほかた侍るをなをそしと弟ひそもしめてのたいめに
かくあれうちやさはなれてさやおほかさめとしふかくなりの
ちまへはこそとき、稲松の根もこころにかくさくびせてそこにくん
さしの侍りつる、ぬるは、それ志ん侍りぬ、さまつかし古今集のま
はしまつりへなとして翁しかいひて、この文も侍へ侍らむにてか
うらめるかのとくるにいはむ、しの人の口づつからをしへし事
乃いさゝの耳にとてまり侍るをとすぬひ侍るへし、さやうなからは秘
事なかるねは、めつらしからぬ伝授のかねは、あやしきさるはなし。こて

そこなどのあさなげかるゝ絶つきぬことゝもすて、書うつし給し
ぶらふとぞ。せめてこれがんとはかりのたぐひとおぼせしよ
しの人此やし。ハ古今集伝授といふ事ふるくハなかりし法性寺
殿。大宮右大臣俊家公のむすこに。左衛門佐基俊といふ
人。彼やゝ。その道に名ある人にておはしけるが。南円堂の
観音に所願をいのりされしに。大ほの古徳まてなり給ぬ
つまうしの告ありて。初く来るとらまへくゝまじ。山法師のむす
め。アヂゴといふ者の。母くるが。道をうけ継よしにて。伝授
せられしとなん。之光院内府法説とうけ給り伝るものゝ
歌を。俊成卿。彼基俊ぬしの弟子となり。伝授し給ひ。深
く秘し給ひぬるとそ。其時俊成廿五歳。基俊あそん八
十五とそきこえし。俊成卿
先なくてゆゑのしるへハちゑけまし　古ハ今此おほつかなき哉

返し　基俊
かきたむる古ハ今此の文義のこゝろを君に伝へはるかな
と風雅集に見え侍るぞ。まことのことなるべし。いづれの時
にや。内裏にて。古今の序に。よしの山のさくらを。人まろがめにハ
雲かとのみなんおぼえけるといふハ。いづれの歌のよみうしかと
て俊成卿に。彼家の本をめされて。帝御読ありけるに。押紙し
させらる所をもちて御読せんとしけるに。俊成卿をしてやらるゝやう
をひとつてかしこまりぬ。其時天気よろしからず。俊成卿いハ
く。是ハ家に伝し秘言なり。あらそひかくべきをめされてとも。此
師伝にあらずして。かろくしくさづけ奉りしと申されける
とかや。帝かさねて。俊成卿をおほせ事の子細をきこし召
道を執する事非ぬなりと仰られけるとぞ。されハ此俊成卿
より。歌道宗匠の家。相続て。子孫うまれ来るまで。勅撰乃

撰者と宗祇とハ久しく隔りしかハ、むかしの人の申しハ定家卿までの
僻案抄、顕注の密勘なとこそいはまし、かの古今伝授といふへし。
さる故ハなかりける事をいひなすにてこそ説注附之とて受古今之説
之時、さもしたれとも又伝へてハさらになとも宗祇か定
家て豈いはさらん、宗祇なといつもまて又何の益かあらむ。宗祇の昭
より伝へ給ふ説を用捨もなく書しるし給ふものとみえたり。
僻案抄奥書云、往年治承之比、古今後撰両集、受庭
訓之口伝、年序已久、雖恐忽忘、先達古賢之所注、後
代所見猶非無其失、況依恥管見謬説、故不載紙筆、
今迫耄及之期、顧餘喘之尽、至于愚老之没後、為散
遺孤蒙昧、抽最要密々所染筆也、更莫令他見、嘉禄
二年八月日とあり。是定家卿六十八九歳の時なるへし
といへり。其ほかの書も其のまゝなるまで、抜よりて其のもあらひた

つたへられてゆゑありしもなきことを思ふ人もあるへし。又ある人
申しハ、古今伝授も文明のころはしまりしことにおなしうたかはしといへり。
さることにやいなやさたかならねと、いまし今これかれをあはせみるにもしらぬの
しき事なれと、翁こそうちもたぬつたへ事ニハあらすかし。其もみつ
みよしふ有ものの事まて、細川玄旨翁たまての因をおほいハ
しられ、又因ニ未かいくさ彼城をかこみてときあやふかりし時
八條の宮へ古今説のことをさつけ給ひて
「いましても今もかたりぬ世の中にまことのうつしかたをのこしてとの給ひ
よみもよみて、なり給ひて、別ニ相計ある事とて人も伝
しかと、是又古今伝授の名院のおくく紹巴とつたへの古
今の事とのこしつたへしのみ、彼ハ乞食の客なれハとて伝へ給
ふとの給ひ、彼古今集の序ニ乞食之客以此為活計謀と
いへるを、おほしめしたるなりし。さもあるへき事なりと思ふ人

のちしハ應仁のほとや宗祇より人伝しらせ人の法ちやいふまし

つきさくにさまさま古今伝授なとのうへまでもくさくの秘事伝授

といふ事ハいひそめしにやあらんそれをいつれにもよらす貞徳と云

人の出しおほきかくの事ハ祇公の法流なる道ハそれぞ人伝をうけ

まなど是ハ家の道とて秘せらるゆゑに法をおひ其力とてあらぬ説をも

且道ハそれなりなどいつて其法を其流をまもりわびらふつもむく人な

きこえし事たがふましぞも其道を秘せらるとなるハそれ法をそへつき

其よし事たりぬてし仏でもあらぬ事をもかきそへてなるほど人を

まどはさるや・さる意（ココロ）ばなる人のそしられ学にきけれあひてぞ権

人の名利令を法の人々それらの秘みつ伝授てふことをかうけ

活計の謀となせるや・それを伝へし人の又おのおのがてとくそ

つく秘事伝まし伝授を法のりしより今の世の学ハその事わづ

らふしきそのてまなれど・あまくして・そのふることを学ふ人ぞ

しかるをこれらあくまでふさきも秘事伝授といふ事我やむ

我和哥の此道もいよいよしくハさるやうにてあるべき我彼活計の法よ

そこらなるやうなくかくてなりゆきしまでや静に道をたゞし

む人ハおのつからをわいて説ありくしとそやし学ハ古への事なら

ねど事おもなきにふとかしぞうし彼集をもちうるの事ハ

顕昭に万葉集残りてよくてわかりてれハかくる事なし範兼

あるの説まさるなり稲負鳥を清輔朝臣和名鈔によりて

順がうまさしくおしふ事をも今の学ふ宮でしらいひ顕昭を

一所從稲負鳥をと云ひ拙の伝へ給ふ事あまた名字不知鳥の家朝

よそらなはつりいひつつて文字なさまを教あるれといつて家勘

まもいなおほせ鳥先人説是よ同し是ヒ今按候ていふもや

と是ひ伝まうて無名證同清輔朝臣とのつまへり清輔朝臣ハ

和哥の弘才なりびかしといふなれし人なり顕昭法師ハ此その勤学

博覧なりしに無拘まして、宣長とても称歎し給ひし人ぞかし
人々のいはまでかゝはらざりし、打まかせかゝはらざる事はまことに、されど
彼ものしたる契沖も、三木三鳥なとお伝ヘど、云ることくしけるは
いつも後来宣長をはじめ、後世流にハ清輔顕昭の先までも志りさる事
明らかのなりしを今まで見て、ある鳥をかなどいふ人事、然るを
諸々のまどはしけんとぞいはれし、さて、かの稲負鳥ハ、顕註密勘
隠書なるなどもくはしく志るしあつめたれども、呼子鳥ハ何の鳥とも
なし、宣長も三鳥を釈して、豈一鳥定むし給ふ人也、顕昭法師に
知りきらん也、此よしの書をこそ清までハ、されしくもよく知りたる
なかれハ、常に及ばざるなるべし、されハ人毎によめる歌も多くあらんし
あらず、これハ伝授となつかしハ、さらに用のなきにやあらんとも
申めり、通村のおほぢの伝説に、呼子鳥のなき古今の大事なれど、
今ハ東家のまで用捨し、今までもよまず、然いはれぬ事なり、和
歌の題にも出しあるまで志るし、さやうに制せらるゝなれば、ハ定
家為家なとの制の詞にも入らば、出歌にもよまれまじき事なり、
宗養なとにてハ東常縁までもせられし也、古今の大事として其鳥の正
躰を秘せしハあしく、後列の為になるべし、然れハ百千鳥稲負鳥も
今とくく秘するなれハ、ハやく定家の納集あるとも見えハ
し給ふへき事ハ、諸々の事、又当時にても見るべし、いうま
は世歌ハ唯はしき事とて、しかし、此呼子鳥とて秘するなるぞ
語も知りたる事なれハ、近代の出顕まにこそ古今伝授の切帋
とて、人の見せたるにも、何ぞといふ事ハなし、只人間の表示とて
え知り、或ハ猿或ハ鶯或ハ鳩或ハ何とかやとて、一葉まで鶯子
そちらされて知らるゝ人ハ多くハ、知るべきならぬをハいと
ふるとも、いかなる説く多くし、又節といふ説また本に斎院北
して居かてなるといへり、是ハ一葉の説といふ人もあり、それなるハ

古今集の頃にハ入るべからん新古今の詞のあるをいふ事もさらなり
ぜひ此集に縁るよふことさら此歌あり、とこゝろえへく
おほかたしも此説を見ず、わかれども古人の歌によみつけたる
なれハいかにもよむべき道理なり。只めづらしきをよむましくハ広大
此三の歌に載なけれバよむましきにやとのたまへり。一條禅閤ハ此
歌をば同じと知りても其異名をば歌によまむ事なかれと
論ぜられし事なり。口伝あるともかくれてあらんともの給へり。
さるにても、かの僧契沖といふ人のそのころいたしつる書ちらしそ。
日本紀万葉集の歌をもよみとき、源氏物語のかきたる書く
なき深きを探りて、いにしへのあやしの哥をもかんがへ出てそのおほ物
をもつて西行此中のうたのよしあしを見てまたしれたることぞうけ給
しも今ハ世にひろまりぬれバおのづから見る人多きにこそ
其よし此よふに歌の事なにとてかくこれを沙汰して給ふに歌冊

うまをに

家持卿にて古人をもてなさぬをあはれみても古人とよめるそれ
源仲正か歌に
ひとりのみ山路のこゑてまさかりちらせし花のまつへになきたるかと
さそふともうらむ行て声の名付けけむ鳩はけふも来ゆやゆき
ハむかしよりかくよみ来り要りよし人のうたに
かやうのことばハれいのまよひなるゆゑなれバよふ春のなごり久しき
此三首を引くハいちく和名抄に鳩和名よふこ鳥を出されて
とし野王按に此鳥種類甚多鳩其惣名也といへるをもて引
されハ仲正が哥をもて曽丹か哥へ引合て沙となせるに彼鳥
よぶことりといふ鳩にやあらんと侍しかども、いにしへやつれたるを
よりて今のくせにつけて、ふとおもひ出し事なれバ侍まちつゝ
此説悟集の古本をも見侍しに

あやさけハ老のまさらん人よくまてのこゝろよりつとうつ花
とゆり此今のあやさけハ老のまさるまふていへるハおさらく彼よりよう
うらゆあやをさしてよめるぞいつなる所ちをを
老のまさらん人よくてなるハいつさけ此今契沖師の説よよくかな
つなりといへハ翁あやさけ㳒おもちひてめづらしくうけ給るもの
これ亦うらに此今よく萬葉の説よかなひて餘林於編集乃
此彼古來の本集をほしまつるハ先んて引用て證と也な㳒つさきを
などいひしらるるむらなの峯よ雲を流しまるやうなる
やおもうていなきのうひくえさなる外をもうれしくもまても
とそまで入日るなやかにさしまそるよ霞のやかなる雨ここつ思ひき
つぶさのあれみそほとまでしのあしきやく外もちつゝ嘆きて一ト日
まうり此翁よ見かきくましきのをくぶさてきさ文くうちざとふ
まうるもの部も添てきちつさとしあつぞあしをそらに
てお鳴ちのうゑいそきしがたをゝふし外樂のわらし也翁ふ
とおもまりうちきくうまれ人東西よあそりやすふほらまお翁を（かうかうせ）
きくえうしなひつるぞくちをしきや

久保之取蛇尾　次巻近刻

天明四年季秋

大坂北久太郎町心齋橋筋

柳原喜兵衛